

再発見・牛久第十一話

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功

小川(芋銭)家系譜④

佐々木・木村・小川

木村常陸介重茲

―関白になった

豊臣(羽柴)秀次付重臣(家老格になる)―

木村常陸介重茲は

小田原城主北条家征伐軍や

朝鮮出兵による渡鮮軍に加わる

天正18年(1590年)の正月に始まった豊臣秀吉の小田原城北条家征伐によって天下平定が確定した。

秀吉の北条家(氏政・氏直父子)が籠城する小田原城攻めの記録の中に、木村常陸介重茲の名が出てくる。秀吉の軍勢は、陸路海路総勢21万余、この大軍が小田原城を十重二十重に囲んだ。北条家では、本拠小田原城防備のために箱根の山中に10カ所、出城を築いておいた。その主城山中城(現静岡県三島市)を、右翼を堀秀政率いる2万の兵、中央を羽柴秀次以下2万の兵、左翼を総大将徳川家康麾下3万の

兵、これら総勢7万の大軍が猛攻して、これを数時間で陥れた。

山中城落城後に、浅野長政や、徳川家康の家臣らとともに常陸介重茲は、別動隊を編成して北条家支城の江戸城(東京都千代田区)、土気城(千葉市)、東金城(東金市)、江戸崎城(現稲敷市)などを攻略した。

城主岡見家(尾上)の牛久城も北条家の五十余の支城の一つで、小田原城が落城すると秀吉の馬廻役山田太左衛門が奉行となって接収にきた。

翌天正19年(1591年)、秀次は秀吉の養子となり関白職を譲られ、秀吉自身は太閤となった。

さらに翌文禄元年(1592年)正月、秀吉は、後陽成天皇に奏請して、勅命を奉じ、朝鮮出兵の軍令を全国に諸大名に下した。3月になると秀吉自身も、総大将として、将兵を従え、京都聚楽第を発ち、肥前国の名護屋城(現佐賀県唐津市)に到着し、ここを大本営と定めた。名護屋城には合計30万3500名にのぼる大軍団が参集し、在陣衆は徳川家康ら14名の大名で、渡海軍

は1番隊から9番隊まで、9軍団に編成された。先鋒として渡鮮したのは小西行長・加藤清正の両大名であった。9番隊(2万5500名)は織田秀信・細川忠興など18大名で、その中に常陸介重茲の名もあった。

関白豊臣秀次が謀反の嫌疑をかけられ切腹―
―謀反をそそのかしたと

断ぜられ常陸介重茲も切腹―

秀次と秀吉は関白と太閤、甥と叔父、養子と義父という関係で結ばれていた。ところが、文禄2年(1593年)8月に、秀吉の側室淀殿に実子拾丸(のちの秀頼)が誕生すると、事情は一変することとなった。

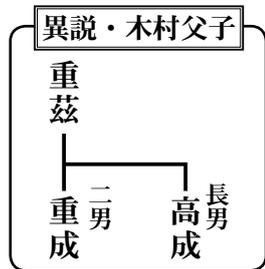
史実によれば、秀吉は、拾丸の誕生後、秀次への政権移譲を後悔するようになり、拾丸への盲愛から尋常でなくなっていく。

秀吉は、政務執行機関である五奉行の筆頭石田三成の諫言を鵜呑みにした。

文禄4年(1595年)7月、秀吉に秀次が謀反の嫌疑をかけられた。秀次側近の重臣(家老格)木村常陸介重茲、栗野秀用、前野長秀は奸臣とされた上で、秀次をそそのかして謀叛を企てさせたと断じられた。

同年8月、秀吉は後陽成天皇に奏請して、秀次の左大臣・関白の官職を剥奪した。そうしておいて秀次を伏見城に召喚し、「反逆は明白である。高野山で沙汰を待て」と命じ、数日後に切腹を命じた。秀次切腹後、常陸介重茲も切腹を命じられ、摂津国の大門寺(現大阪府茨木市)で切腹した。

同時期、三成に讒訴された細川忠興が、老臣松井康之の尽力と徳川家康の斡旋で難をまぬがれるという事件も起こっている。



木村常陸介重茲には長男高成と二男重成の子があり、高成は大門寺法花堂で切腹し、重成は幼年のため罪に問われなかったという。



木村常陸介重茲が切腹した神峯山大門寺(真言宗仁和寺の末寺)。所在地・大阪府茨木市大字大門寺。